

令和3年度病害虫発生予報第7号

令和3年10月1日
山梨県病害虫防除所

今月の天気予報

9月30日気象庁発表、1か月予報による関東甲信地方の向こう1ヶ月（予報期間10月2日～11月1日）の天気は次のとおりです。

暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高く、期間の前半はかなり高くなる見込みです。高気圧に覆われやすい時期があり、向こう1か月の日照時間は平年並が多いでしょう。向こう1か月の降水量はほぼ平年並の見込みです。

I 特に注意が必要な病害虫

【野菜】

作物	病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
抑制トマト	黄化葉巻病	—	やや多い (例年比)	○9月下旬現在、巡回ほ場での発生はやや多い。 □発病株は見つけ次第抜き取り、ビニール袋に入れてコナジラミ類を死滅させ、枯らしてから施設外に持ち出し、土中に埋めるなど適切に処理する。
	コナジラミ類	—	平年並～ やや多い (例年比)	○9月下旬現在、黄色粘着トラップほ場（中央市）のコナジラミ類の誘殺量は例年並からやや多い。 ○向こう1か月の気温は、高い見込みである。 □ウイルス病を媒介するコナジラミ類の侵入防止のため、施設開口部（天窓、側窓、換気扇口等）を被覆しているネット等については、隙間や経年劣化の穴がないかなど、施設の点検を定期的に行う。 □黄色粘着板を設置し、コナジラミ類の誘殺状況を確認し、発生初期の防除を徹底する。 □同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。 □施設内外の雑草は、コナジラミ類の増殖源となるため除草を徹底する。また、芽かきした茎葉は適切に処理する。 □ウイルス病の発病株は見つけ次第抜き取り、ビニール袋に入れてコナジラミ類を死滅させ、枯らしてから施設外に持ち出し、適切に処分する。

II 各作物の病害虫発生予報

【果樹】

作物	病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
モモ・スモモ	モモせん孔細菌病 ・ スモモ黒斑病	—	平年並	○9月下旬現在、巡回ほ場の一部において発病した葉が認められる。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □台風等に伴う強風や降雨により感染が拡大し、越冬する病原細菌が増える恐れがある。 □発病枝、葉は速やかに除去し、秋季防除を徹底する。特に落葉が遅い場合や台風が接近する恐れのある場合は、追加防除を行う。 □III各病害虫対策ならびにモモでは「せん孔細菌病防除マニュアル（令和2年12月発行）」を参考に防除対策を徹底する。

※防除薬剤は山梨県農薬適正使用サポートシステムで検索

<http://www.nouyaku-sys.com/nouyaku/user/top/yamanashi>

【野菜】

作物	病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
抑制トマト	疫 病	—	平年並	○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 □施設内が多湿にならないように過度な灌水は控え、換気を行い、施設内の湿度低下に努める。 □早期発見に努め、発病した茎葉・果実は除去して施設外に出し、処分する。 □窒素過多にならないようにする。
	灰色かび病	—	平年並	○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の降水量は、ほぼ平年並の見込みである。 □施設内が低温、多湿にならないよう、換気と適度な灌水を行う。 □早期発見に努め、発病した葉・花卉・果実は除去して施設外に出し、処分する。 □前年多発した施設では発生に注意し予防散布に努める。
	葉かび病	—	平年並	○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □施設内が多湿にならないように過度な灌水は控え、換気を行い、施設内の湿度低下に努める。 □多発生すると防除が困難なため、早期発見に努め、初期防除を徹底する。 □発病した葉は伝染源となるため、除去して施設外に出し、処分する。 □葉かび病抵抗性品種でも発病する葉かび菌が発生しているため、抵抗性品種でも葉かび病の症状が出ていないか注意する。
	すすかび病	—	並 (例年比)	○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は例年並である。 ○向こう1か月の気温は高く、降水量はほぼ平年並の見込みである。 □施設内が多湿にならないように過度な灌水は控え、換気を行い、施設内の湿度低下に努める。 □多発生すると防除が困難なため、早期発見に努め、初期防除を徹底する。 □発病した葉は伝染源となるため、除去して施設外に出し、処分する。 □葉かび病と似ているため、防除には両方に登録のある薬剤を利用する。
抑制キュウリ	べと病	—	平年並	○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の降水量は、ほぼ平年並の見込みである。 □施設内が多湿にならないように過度な灌水は控え、換気を十分に行い、施設内を適度な湿度に保つ。 □多発すると防除が難しくなるため、発生初期の防除を徹底し、発病した葉は除去して施設外に持ち出し処分する。
	うどんこ病	—	平年並	○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の降水量は、ほぼ平年並の見込みである。 □早期発見に努め、発病した葉・果実は除去して施設外に出し、処分する。 □多発すると防除が難しくなるため、予防防除に重点を置く □同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。

※防除薬剤は山梨県農薬適正使用サポートシステムで検索

<http://www.nouyaku-sys.com/nouyaku/user/top/yamanashi>

【野菜】

作物	病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
抑制 キュウリ	灰色かび病	—	平年並	○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の降水量は、ほぼ平年並の見込みである。 □施設内が低温、多湿にならないよう換気と適度な灌水を行う。 □早期発見に努め、発病した葉・花卉・果実は除去して施設外に出し、処分する。 □前年多発した施設では発生に注意し予防散布に努める。
	褐斑病	—	平年並	○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の降水量は、ほぼ平年並の見込みである。 □施設内が高湿多湿にならないように過度な灌水は控え、換気を十分に行い、施設内を適度な湿度に保つ。 □予防散布を徹底し、発病した葉は早期に除去して施設外に出し、処分する。 □カンタスドライフロアブル、ベルコートフロアブルは一部に耐性菌が確認され、今後の耐性発達が懸念されるため、連用を避ける。
	アブラムシ類	—	平年並	○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は、高い見込みである。 □発生初期の防除を徹底する。
	ハダニ類	—	平年並	○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○1向こう1か月の気温は、高い見込みである。 □発生が多くなると防除が困難になるため、発生初期の防除を徹底する。 □薬剤抵抗性が発達しやすいため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。 □葉の裏に多く寄生するため、薬液が葉裏にも十分かかるよう丁寧に散布する。
夏秋 キュウリ	べと病	—	平年並	○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の降水量は、ほぼ平年並の見込みである。 □予防散布に努める。 □早期発見に努め、発病した葉は除去して処分する。
	斑点細菌病	—	平年並	○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の降水量は、ほぼ平年並の見込みである。 □曇雨天が続くと発生が多いため注意する。 □予防散布に努める。 □病葉は早期に摘み取る。
	うどんこ病	—	平年並	○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の降水量は、ほぼ平年並の見込みである。 □予防散布に努める。 □早期発見に努め、発病した葉は除去して処分する。
	炭疽病	—	やや多い	○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量はやや多い。 ○向こう1か月の降水量は、ほぼ平年並の見込みである。 □発病後の防除は効果が劣るため、予防散布に努める。 □早期発見に努め、発病した葉は除去して処分する。 □窒素過多は発病を助長するため、施肥量に注意する。

※防除薬剤は山梨県農薬適正使用サポートシステムで検索

<http://www.nouyaku-sys.com/nouyaku/user/top/yamanashi>

【野菜】

作物	病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
夏秋キユウリ	アブラムシ類	—	平年並	○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は、高い見込みである。 □発生初期の防除を徹底する。
	ハダニ類	—	平年並	○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は、高い見込みである。 □発生初期の防除を徹底する。 □薬剤による抵抗性がつきやすいため、同一系統薬剤の連用は避け、ローテーション散布を行う。
	アザミウマ類	—	平年並	○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は、高い見込みである。 □発生初期の防除を徹底する。 □ほ場周辺の雑草はアザミウマ類の発生源となるので、除草を徹底する。
夏秋ナス	褐色腐敗病	—	平年並	○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の降水量は、ほぼ平年並の見込みである。 □ほ場の排水性を良好に保つ。 □長雨や台風後は発生しやすいため、降雨前または降雨後に薬剤散布を行う。 □降雨中に収穫した果実は乾いてから箱詰めする。
	うどんこ病	—	並 (例年比)	○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は例年並である。 ○向こう1か月の降水量は、ほぼ平年並の見込みである。 □予防散布に努める。 □早期発見に努め、発病した葉は除去して処分する。
	ハダニ類	—	並 (例年比)	○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は例年並である。 ○向こう1か月の気温は、高い見込みである。 □発生が多くなると防除が困難になるため、発生初期の防除を徹底する。 □薬剤抵抗性が発達しやすいため、同一系統薬剤の連用を避け、ローテーション散布を行う。 □葉の裏に多く寄生するため、薬液が葉裏にも十分かかるよう丁寧に散布する。
	アザミウマ類	—	並 (例年比)	○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は例年並である。 ○向こう1か月の気温は、高い見込みである。 □発生初期の防除を徹底する。 □ほ場周辺の雑草はアザミウマ類の発生源となるので、除草を徹底する。
	ハスモンヨトウ	—	平年並	○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○9月下旬現在、夏秋ナス調査ほ場（甲府市、笛吹市）におけるフェロモントラップへの誘殺数は平年並である。 ○向こう1か月の気温は、高い見込みである。 □老齢幼虫には薬剤の効果が低いので、若齢幼虫のうちに早期防除を徹底する。 □卵塊や分散前の若齢幼虫を発見したら速やかに捕殺する。

※ハスモンヨトウのトラップ調査結果

<https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/00035185449.html>

※防除薬剤は山梨県農薬適正使用サポートシステムで検索

<http://www.nouyaku-sys.com/nouyaku/user/top/yamanashi>

【野菜】

作物	病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠 (○) 及び防除上注意すべき事項 (□)
夏 秋 ナス	オオタバコガ	—	平年並	○9月下旬現在、巡回ほ場（甲府市、笛吹市）における発生量は平年並である。 ○9月下旬現在、夏秋ナスほ場（甲府市、笛吹市）におけるフェロモントラップへの誘殺数は平年並である。 □老齢幼虫には薬剤の効果が低いため、発生初期の防除を徹底する。 □幼虫は果実内部に食入し、農薬がかかりにくくなるため、作業の際にはほ場をよく観察し、食害痕や虫糞を目安に幼虫の早期発見に努める。
	黒腐病	—	やや多い	○9月中旬現在、巡回ほ場における発生量はやや多い。 ○向こう1か月の降水量は、ほぼ平年並の見込みである。 □曇雨天が続くと発生が多いため注意する。 □予防散布を徹底する。 □発病株は早期に除去する。
キ ヤ ベ ツ ・ ア ブ ラ ナ 科 野 菜	菌核病	—	平年並	○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の降水量は、ほぼ平年並の見込みである。 □台風、大雨の後に発生が多いため注意する。 □予防散布を徹底する。 □収穫後の残さは丁寧に片づけ、焼却処分する。 □アブラナ科野菜の連作を避ける。 □耐病性品種を用いる。
	コナガ	—	平年並	○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○9月下旬現在、キャベツ調査ほ場（鳴沢村）におけるフェロモントラップへの誘殺数は平年並である。 ○向こう1か月の気温は、高い見込みである。 □薬剤に対する抵抗性がつきやすいので、同一系統薬剤の連用は避け、ローテーション散布を行う。 □鳴沢地域において、フェニックス顆粒水和剤、プレバソンフロアブル5、マッチ乳剤、ハチハチ乳剤、パダンSG水溶剤に対する感受性の低下したコナガが認められたため、異なる系統のローテーション散布を行う。
	アブラムシ類	—	平年並	○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は、高い見込みである。 □発生初期の防除を徹底する。
	炭疽病	—	平年並 ～ やや多い	○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量はやや多い。 □苗による本ほへの持ち込みを防ぐため、育苗中は予防散布を徹底する。 □発病株は感染源になり、降雨や灌水により急速に蔓延するため、発病が確認された株は直ちに抜き取って適切に処分する。 □窒素肥料の多用は発生を助長するため、適正な肥培管理に努める。
イ チ ゴ	うどんこ病	平年並	平年並	○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 □早期発見に努め、発病した茎葉は除去して施設外に出し、処分する。 □発生初期の防除を徹底する。

※オオタバコガ、コナガのトラップ調査結果

<https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/00035185449.html>

※防除薬剤は山梨県農薬適正使用サポートシステムで検索

<http://www.nouyaku-sys.com/nouyaku/user/top/yamanashi>

【野菜】

作物	病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
イチゴ	<u>ハダニ類</u>	—	平年並	○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 □発生初期の防除を徹底する。 □薬剤による抵抗性がつきやすいため、同一系統薬剤の連用は避け、ローテーション散布を行う。

【野菜全般】

病害虫名	発生時期	発生量	予報の根拠（○）及び防除上注意すべき事項（□）
<u>うどんこ病</u>	—	平年並	○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○10月の降水量は、ほぼ平年並の見込みである。 □早期発見に努め、発病した葉は除去して処分する。
<u>アブラムシ類</u>	—	平年並	○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○10月の気温は高い見込みである。 □発生初期の防除を徹底する。
<u>ハダニ類</u>	—	平年並	○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○10月の気温は高い見込みである。 □発生初期の防除を徹底する。
<u>オオタバコガ</u>	—	平年並	○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○9月下旬現在、定点調査ほ場（甲府市、笛吹市、鳴沢村）におけるフェロモントラップへの誘殺数は平年並である。 ○10月の気温は高い見込みである。 □老齢幼虫には薬剤の効果が低いため、発生初期の防除を徹底する。 □幼虫は果実内部に食入し、農薬がかかりにくくなるため、作業の際にはほ場をよく観察し、食害痕や虫糞を目安に幼虫の早期発見に努める。
<u>ハスモンヨトウ</u>	—	平年並	○9月下旬現在、現地ほ場における発生量は平年並である。 ○9月下旬現在、夏秋ナス（甲府市、笛吹市）の定点調査ほ場におけるフェロモントラップへの誘殺数は平年並である。 ○向こう1か月の気温は、高い見込みである。 □老齢幼虫には薬剤の効果が低いので、若齢幼虫のうちに早期防除を徹底する。 □卵塊や分散前の若齢幼虫を発見したら速やかに捕殺する。
<u>アザミウマ類</u>	—	平年並	○9月下旬現在、巡回ほ場における発生量は平年並である。 ○向こう1か月の気温は、高い見込みである。 □発生初期の防除を徹底する。 □ほ場周辺の雑草は発生源となるので除草を徹底する。 □施設では施設開口部に防虫ネットを設置する。

※オオタバコガ、ハスモンヨトウのトラップ調査結果

<https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/00035185449.html>

※防除薬剤は山梨県農薬適正使用サポートシステムで検索

<http://www.nouyaku-sys.com/nouyaku/user/top/yamanashi>

III 各病害虫対策

【ブドウ】

晩腐病

ほ場内を丁寧に見回る。発病した果粒は伝染源となるので見つけしだい取り除き、ほ場外へ持ち出し、土中に埋める等適切に処理する。

ブドウトラカミキリ

- (1) 発生が多い園では、10月下旬～11月上旬の晴天が続く日を選び、トラサイドA乳剤200倍またはラビキラー乳剤200倍を散布する。ただし、隣接園に収穫前の果樹がある場合は飛散しないよう注意する。
- (2) 住宅隣接園では、上記薬剤にかえてモスピラン顆粒水溶剤2000倍を10月中旬までに用いてもよい。

【モモ・スモモ】

せん孔細菌病（モモ）、黒斑病（スモモ）

秋雨や台風による感染拡大を防ぐため、9月中旬～10月上旬の間に下表の薬剤を散布する。

作物名	散布薬剤
モモ	ICボルドー412（30倍）または4-12式ボルドー液を、2週間間隔で2回散布する。甚大な被害がでた地域は、2週間間隔で3回必ず散布する。 細菌は強風に伴う雨で広く拡散するため、防除は台風の接近や前線に伴う降雨前に必ず行う。なお、住宅隣接園ではムッシュボルドーDF（500倍）加用クレフノン（100倍）を用いる。ただし、薬害が発生するおそれがあるため、高温時の散布は避ける。また、「令和2年度病害虫防除所情報第7号」を参照する。 https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/documents/jyohoudai7gou.pdf
スモモ	ICボルドー412（30倍）を散布する。細菌は強風に伴う雨で広く拡散するため、防除は台風の接近や前線に伴う降雨前に必ず行う。

【モモ・スモモ・オウトウ】

コスカシバ

発生が多い園では、10月～11月中旬にトラサイドA乳剤200倍またはラビキラー乳剤200倍を散布する。ただし、隣接園に収穫前の果樹がある場合は飛散しないよう注意する。

【夏作物収穫後対策】

ナス青枯病・半身萎凋病、トマト半身萎凋病・青枯病、キュウリつる割病、キャベツ黒腐病・根こぶ病、ネコブセンチュウ等

- (1) ナス、トマト、キュウリ、キャベツ等夏作物収穫後の根、株、茎、葉等は翌年の伝染源になるため、早めに抜き取り、ほ場から持ち出し適切に処分する。
- (2) 前年発生の見られたほ場では作付けをしない。
- (3) 輪作を行う。

【サツマイモ基腐病の対策】

近年、九州地域のサツマイモ産地において発生が確認され、被害地域の拡大が見られている。発病すると地際部から茎が枯れ、いもが腐敗する症状を引き起こすことにより、大幅な減収を生じる。本県での発生は確認されていないが、被害の蔓延を防ぐため、以下の点に注意する。

- (1) 未発生ほ場で生産されたことの確認などにより、健全な種苗を確保する。
- (2) 植え付け前の種苗消毒を行う。

※防除薬剤は山梨県農薬適正使用サポートシステムで検索
<http://www.nouyaku-sys.com/nouyaku/user/top/yamanashi>

(3) 栽培期間中は、ほ場観察を通じて本病の早期発見に努め、発病株はほ場外に持ち出して適切に処分する。

本病の防除に関する詳細な技術対策については、農研機構のHPに掲載されている、以下のマニュアルを参照とする。

「サツマイモ基腐病の発生生態と防除対策（令和2年度版）」

https://www.naro.go.jp/publicity_report/publication/pamphlet/tech-pamph/138589.html

【表】

種子伝染性病害

種子伝染性病害には、裸黒穂病、なまぐさ黒穂病、斑葉病などがあり、これらの病害は春先以降に発生する。

(1) 温湯浸漬または冷水温湯浸漬する（県病害虫防除基準参照）。

(2) 薬剤による消毒は以下のいずれかの方法で行う。薬剤によって適用病害が異なるので、使用する前に登録内容を確認する。

- ・ホーマイ水和剤、トリフミン水和剤のいずれかを種子重量の0.5%粉衣する。または、ベンレートT水和剤20を乾燥種子重量の0.5%粉衣する。
- ・ホーマイ水和剤の200倍液またはベンレートT水和剤20の200倍液に6～24時間浸漬する。

IV その他

【農薬の保管管理と適正使用について】

- 1 農薬の適正使用や、計画的な購入のため、農薬保管庫の整理を行いましょう。
- 2 有効期限切れなど使わなくなった農薬は放置せず、処理業者に依頼して適正に処分しましよう。
- 3 農薬を購入・使用する際には、農薬登録番号や使用基準などの登録内容を必ず確認しましよう。
- 4 農薬による事故を防ぐため、保管庫にはカギをかけておきましよう。
- 5 農薬の使用にあたっては、使用方法をよく確認して正しく使いましよう

※参照 https://www.pref.yamanashi.jp/nougyo-gjt/kenkyu/nouyaku_shiyou.html

防除薬剤は山梨県農薬適正使用サポートシステムで検索

<http://www.nouyaku-sys.com/nouyaku/user/top/yamanashi>

ただし、他作物が隣接して栽培されている場合は、農業協同組合が作成した代替薬剤の防除暦等を参考に、薬剤を選択する。

連 絡 先

山梨県病害虫防除所（山梨県総合農業技術センター調査部）

TEL 0551-28-2941

Eメール byogaichu@pref.yamanashi.lg.jp

インターネット

山梨県病害虫防除所ホームページ

予報対象作物を中心に「トラップ調査結果」「病害虫写真」等を掲載しています。

アドレス <https://www.pref.yamanashi.jp/byogaichu/>

山梨県農薬適正サポートシステム

山梨県病害虫防除基準・農薬適正使用指針に掲載された農薬の最新登録内容を確認できます。

アドレス <http://www.nouyaku-sys.com/nouyaku/user/top/yamanashi>

※防除薬剤は山梨県農薬適正使用サポートシステムで検索

<http://www.nouyaku-sys.com/nouyaku/user/top/yamanashi>